

農業用水の歴史を訪ねて

平成二十五年三月 岐阜県農地整備課



本書では岐阜県内の農業用水やため池について紹介しています。

0km 10km 20km



白川村

農業用水の歴史を訪ねて

平成二十五年三月 第一版作成

【編集】岐阜県 農地整備課 調査計画係

本書は、平成二十三年から平成二十五年にかけて岐阜新聞に『ぎふ清流の恵み』として掲載された内容を編集・加工し作成しております。

恵那市岩村町



岐阜圏域



本巢市内

席田用水・真桑用水

席田用水と真桑用水は、水稲栽培の記録から弥生時代が起源と見られています。中世以降の水の配分については、双方で激しい紛争が絶えませんでした。この事態を江戸幕府は深刻に受け止め、寛永十六年（1639）に検使団を派遣し、老中名をもつて現地の支配領主（戸田左門、松平丹羽守）に対し話し合いをもつて解決するようその決着をゆだねました。この結果「四分六分の積番水」すなわち干ばつの時は、席田6分、真桑4分の時間番水をするように決められました。現在も、この配分にしがたい、根尾川の山口頭首工から本巢市と岐阜市、北方町の農地に清流を運んでいます。



右：各務原市、左：愛知県犬山市

羽島用水

徳川家康は、犬山から木曾川河口にいたる約五十キロの巨大な堤防、通称「御囲堤（おかこいづみ）」を建設しました。これによって美濃側（木曾川の右岸側）は、三百年に渡り洪水などに苦しむこととなりました。確固たる水源がなかった羽島用水地域が、木曾川に水源を求めようになったのは、洪水の心配が少なくなった大正に入ってから。しかし、同じ時期からは、木曾川の豊富な水を巡る農業と工業の深刻な対立が始まりました。一連の「御囲堤」の呪縛から解放されたのは、犬山頭首工が建設された昭和三十年代に入ってから。羽島用水は、今も木曾川本流から清流を運び続けています。



各務原市内

苧ヶ瀬池

奈良時代には、南北に二十キロメートル、東西に八キロメートルほどの大きさがあったと伝えられている苧ヶ瀬池。その昔この池には、乙女や山姥、大蛇と姿を変え出沒し里人を悩ます龍女が棲んでいたと伝えられています。この伝説によれば、鎌倉時代に武人福富新藏によって鎬矢（かぶらや）の手追いとなり苧ヶ瀬池に舞い戻った龍女は、大いに悟るところがあり、池で身を浄め大安寺開山笑堂禅師の済度（さいど）を受け八木山に登ったと言われています。現在も満々とかがい用の水をたくわえ続けている苧ヶ瀬池では、地域の花火大会も開催されるなど、人々の憩いの場として親しまれています。

瑞穂市内

菱野川用水

菱野川用水の起源は、江戸時代の万延元年（1860）の五月、掛斐川の洪水で堤防が決壊し、樋管の流失をきっかけに、新しく藪川（現・根尾川）に樋管を設け、取水したことに始まります。大正時代には、河川改修に合わせ樋管の位置が上流に移され、ほぼ現在の場所となりました。昭和時代には、受益地の拡大にともなう改築や、根尾川の川底が年々低下し取水が困難となったため、河川床止兼取水堰堤が設置され現在の姿となっています。菱野川用水では、平成二十一年度から用水施設を長持ちさせるための工事（農業水利施設保全対策事業）を実施しており、今後も地域農業に必要な用水を供給し続けていきます。



西濃圏域



揖斐川町内

西濃用水

江戸時代初期の元禄四年（1691）頃、揖斐用水は、取り入れ口を脛永（はぎなが）村（現揖斐川町）の伊尾川（現揖斐川）の河原に設け、池田町杉野、砂畑、上田、東野、白鳥、横井、六之井の水田をかんがいする池田7ヶ村井水と呼ばれていました。当時、干天時には下流まで水が届かず争いの種となり、江戸評定所（現東京）まで行って争った事もありました。また、揖斐川の対岸の井組との対立も繰り返されてきたと伝えられています。

これらに関連する取水口は、昭和に入り、岡島頭首工に統合され、水を巡る争いには終止符が打たれています。

現在は、西濃用水として約5400ヘクタールの農地に清流を選び続けています。



揖斐川町内

揖斐川左岸用水

江戸時代初期、揖斐川左岸用水は、五ヶ村及び北方の各井水からなり、五ヶ村井水は、寛永二年（1625）岡田善同により開削されたと伝えられています。当時の井水口も現在と同様に、揖斐川に設けられていましたが、決められた期間しか設置が認められていませんでした。このため、堰の設置と撤去は、毎年行わなければならず、また、堰が洪水によって流されることも度々あり、その管理は、非常に手間がかかるものでした。

これらが改善されたのは、昭和に入り、揖斐川町北方地方内に取水口を設けた以後です。現在、水路の一部は「歴史の里」、「ホテルの里」、「さくら里」、「せせらぎの里」と名付けられ、地域用水としての役割を果たしています。



揖斐川町内

飛鳥川用水

飛鳥川用水は、揖斐川に合流する飛鳥川から、揖斐川町北方地域へ清流を引用する農業用水路です。この用水路は、江戸時代末の文化五年（1808）に、豊吉と称するものが造成に着手しました。後に北方村の庄屋太兵衛が上納米を手形に工事を続け、太兵衛が勘定不立ちの罪で入るう後は、村人三〇人余りが結束し、岩盤をくり抜いた水路トンネルを仕上げたが、漏水が激しく、用が果たせなかつたと言われています。

その後、ようやく難関のトンネル工事が完成したのは、大正時代になってからです。現在は、トンネルも新しくなり約二百年にもおよびトンネル工事との闘いは終焉しています。



関ヶ原町内

十九女池

十九女池（つづらいけ）は、関ヶ原インターのすぐ北東にあり、近くには戦国時代に数々の功を上げた猛将本田忠勝が関ヶ原合戦時に陣をおいたとされる史跡があります。

およそ水田六町歩の水源となっているこのため池には、大蛇の化身であるお姫様が、横笛を吹きながら若者が居る家を探してはお椀を貸してもらったという伝説「龍女伝説」が残っています。この時に龍女が残した横笛と椀はそれぞれ八幡神社と法忍寺の宝物となっています。

現在は、神秘的な雰囲気漂う水辺に遊歩道が整備され、憩いの場として利用されています。



大垣市内

昼飯ため池

大垣市の北西部に位置する青野地区は、美濃国分寺所在地として中山道沿いに古くから開けた地域です。この地の農業開発は、江戸時代天和四年（1682）青野に館を構えた稲葉正次を継いだ稲葉石見守正休によって始められました。正休公は、村の農事に熱心で所々に池を設け水利を計り、農業を奨励しました。

昼飯ため池は、当時設けられた池の一つと言われており、現在に至るまで大垣市の穀倉地帯を潤し続けています。老朽化が進んだ池は、平成十五年に補修と合わせ周辺整備も行われ、当時とは異なる新たな水辺空間を映し出しています。



関ヶ原町内

池寺ため池

池寺ため池の受益地は、関ヶ原合戦の開戦地として史跡にも指定されている梨の木川の両岸に開けた農地です。

池は、徳川幕府が各地で進めた新規開田事業によって、地区内を南流する梨の木川を堰き止めし築造されたと伝えられています。

相当の歳月と人海戦術により築造された堤長一五〇メートル、堤高二十メートルあまりのため池も、築造後約三百五十年経過した昭和初期には、抜本的な改良工事がなされています。

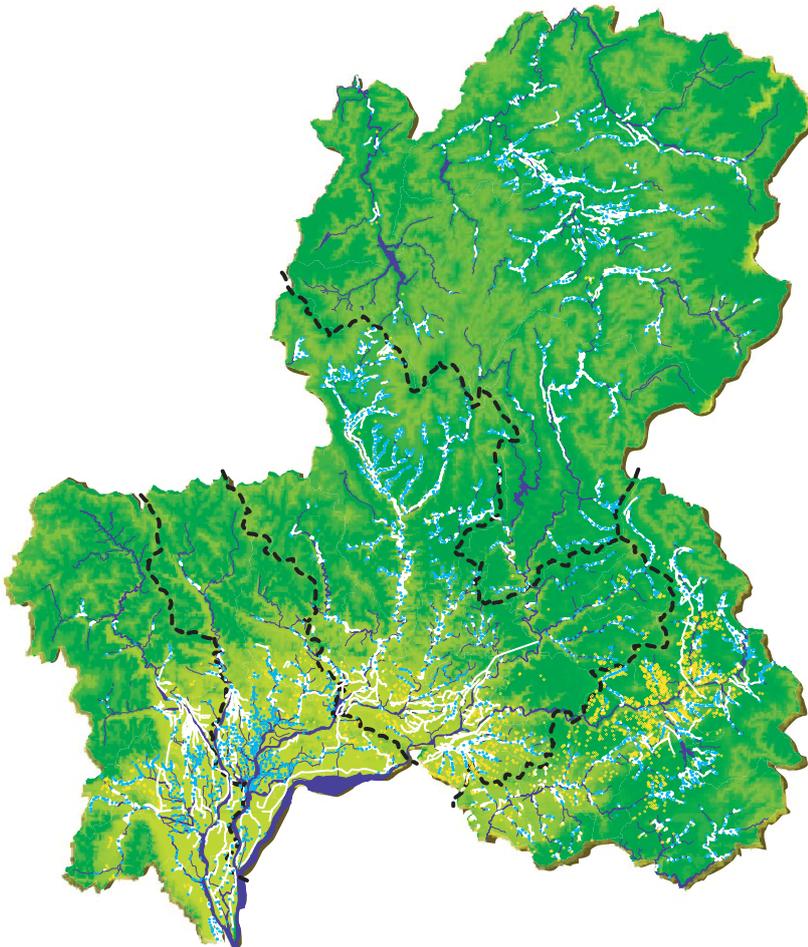


大垣市上石津町内

牧田川用水

鎌倉時代、牧田川には今の様な堤防はなく、川の水は南東の低い方へ自由に流れていました。このため、人々は始めたに水をかぶらない高い土地を選んで住み始め、次第に集落が形成されるようになりました。この土地で稲作を始めた頃には、牧田川の水を利用するようになっていきましたが、ふだんから川の水が少なく人々は、水の取り入れに大変な苦勞をしていました。一部の地域では、河底の下に丸太を四角に組んだ長さ数百メートルのトンネルを築き、そのすき間から落ちる伏流水を集めて用水路に流す「笹桶（ささらひ）」という珍しい工法を考案し施工していました。

昭和九年に完成した現在の頭首工は、地元では広瀬ダムと呼ばれ親しまれています。



- 頭首工及び揚水機等（約2,800箇所）
 - 農業用ため池（約2,500箇所）
 - 主な農業用水路（約3,500km）
- ※各数値は岐阜県農村振興GISの計測値



中濃圏域



岐阜市内

各務用水

各務用水は、明治十六年の大干ばつをきっかけに、時の大宮村（現各務原市）の村長横山忠三郎と芥見村（現岐阜市）の下野甚助らが中心となり、明治二十四年に完成しました。その後は、天候に左右されることなく、豊富な長良川の恵みにより安心して農業が営まれるようになりました。総延長約二十キロメートルの水路は、現在も、地域の人々により大切に守られながら、稲作が行われる時期になると、関市から岐阜市、各務原市の五百八十八ヘクタールの農地へ長良川の清流を運んでいます。



七宗町内

木曾川右岸用水

木曾川右岸用水は、白川町地内で取水した飛騨川の水を、美濃加茂市をはじめとする2市5町に渡るおよそ三千ヘクタールの農地に運び続けています。河川が低地にあり水源に乏しく、恒久的な水不足に悩まされ続けたこの地で、木曾川用水事業が始まったのは昭和三十九年の事です。昭和五十一年から通水を始めたおよそ四十五キロメートルの幹線水路は、そのほとんどが導水路トンネルや管水路で構成され、農業用水を中心に水道用水や工業用水も運んでいます。通水後三十年あまり経過した現在は、将来に渡り施設を守り「水」を安定的に供給していくため、施設の劣化対策など緊急的な改築事業が実施されています。



関市内

上野用水

上野用水は、関市下之保にある「道の駅平成」あたりから津保川の水を運んでいる用水路です。この用水路は、上野地区に住んでいた森田権右衛門が、田んぼが少なく苦しい生活をしている人々を救うために築造したとされています。江戸時代末期の天保十三年（1842）に始まった工事は完成前に川の中の堰が洪水で押し流されたり、堅い岩が作業を妨げるなど、困難の連続でしたが、権右衛門の強い意志により成し遂げられました。この功績は、水の心配がなく農業ができるようになった人々によって石碑に刻まれ、後世に伝えられています。

那留用水

那留用水は、大正六年前ころ、那留ヶ野の竹下喜一郎たちがその原野を開いてお米を作るために計画したものであり、牛道川から那留ヶ野までの導水には、珍しいサイフォンの原理が利用されています。約700メートルあるサイフォン部は、水が漏れない構造とするため、コンクリート製の丸い管が地中に埋められています。この管を作ることは、当時の技術では大変な作業であり、水を通してみると途中で水が噴き出したりするなど失敗が数多くあったとされています。およそ百年経った現在も運ばれる続ける用水は、那留ヶ野まで上がった時、当時、村の人々が上げた歓喜を後世に伝えてくれます。



郡上市白鳥町内



美濃市内

曾代用水

曾代用水は、長良川の水により岐阜県関市から美濃市の農地を潤しています。江戸時代初期の寛文三年（一六六三年）この地に移住してきた尾張藩の喜田吉右衛門と弟の林幽閑は水不足の現状を見かね、地元の豪農の柴山伊兵衛と話し、長良川から水を引く計画を立てました。三氏は私財の全てを使い果たし、十年の歳月を経てようやく約十七キロメートルの水路が完成しました。農民たちは、三氏の功績をたたえ、今でも毎年八月一日に例大祭が行われ多くの人々が感謝の祈りを捧げています。



郡上市大和町内

剣用水

剣用水は、長良川の水により郡上市大和町と白鳥町の農地を潤しています。歴史は古く成り立ちは日本最古の女帝とされている推古天皇の時代と言われています。また、江戸時代後期の文政元年（一八一八年）大島村（現郡上市白鳥町）の新田開発に際しては、元々、水が十分ではなかった剣村（現郡上市大和町）の人たちが計画に異議を申し立て、時の藩が仲裁にも加わりましたが結局水を巡る論争が解決されなかったと言われています。昭和に入ってから黒古川（牛道川ともよばれる）から長良川に取水口が移転され、現在は論争もなく、清流を運び続けています。



岐阜市内

中濃用水（山県用水）

山県用水は、鎌倉時代の初期、梶原平三景時が開削したと伝えられ、流量が少ない武儀川から流れに逆らわず取水するために、箕の手せき（平面的に川の流れに対して斜めに作られるせき）と呼ばれるせきを、松丸太や蛇かごを用いて建設したと記録されています。また、取水の位置（現在とほぼ同じ）も、自然条件を把握した最適な場所であり当時の技術が非常に優れていたことがわかります。現在は、武儀川から取水していた山県用水と千疋用水と、長良川から取水していた池尻用水などを統合し中濃用水と呼んでおり、美濃市から関市、山県市、岐阜市の農地を潤しています。



関市内

倉知用水

倉知用水は、津保川の水により関市の農地を潤しています。この用水の頭首工（河川などより用水路へかんがいが用水を引き入れる施設の総称）は、江戸時代初期の寛永十年頃（千六百三十三年）に、村有林から材料を切り出し、受益者の奉仕により建設されましたが、度重なる水害により毎年の様に大規模な補修が必要でした。現在は、昭和四十五年に行われた津保川の河川改修により近代的な姿に生まれ変わり、かつての松丸太と石で積み上げられていた姿は想像できません。



郡上市美並町内

美並用水

郡上市美並町の農地に長良川の水を運ぶ美並用水には、江戸時代に作られた隧道（トンネル）があり、当時の土木技術を伝える貴重な史跡となっています。寛文五年（一六六五）、当時の郡上藩主の命を受けた高田関左衛門は、大阪から水翁（すいおう）という技術者を招き、当時最も困難と言われたトンネルを完成させました。工事は、峠の頂上に水平器を置き入口と出口の高低を測りながら双方より掘り進められたと記録が残されています。豊かになった福野地区の村人が関左衛門の遺徳を後世に伝えるために建てた碑と、トンネル中央部に残る下流側が約十五センチ低い段差は、当時の歓喜と技術の高さを現在に伝えてくれます。



可児市内

小測ため池

久々利川の上流には、耕地の水害や干ばつ被害を防止することを目的とした小測ため池があります。この池は、建設地周辺の地質が節理の甚だしい硬質の頁（けつ）岩であったため、堤体（ていたい）の材料に、岩石、砂利、土を用いた日本で最初のロックフィルダムです。材料となった岩は、上流約300メートルより採取され、築堤は、トロッコで運ばれた岩を30センチ程度の大きさに割った後、一段一段積み上げて行われました。昭和二十七年に完成した小測ため池は、築造後六十年余りが経過し、地域の風景に溶け込み、可児市でも有数の美しい水辺となっています。

東濃圏域



恵那市内

三郷・山本用水

山本用水は、江戸時代中期の明和七年から八年（1770～1771）に庄屋新三郎が計画し、岩村藩主に願い出たのが始まりと言われています。対岸の三郷用水は、山本用水より取水歴が古くことから取水口を上流に設け優先取水していましたが、両用水の間には、度々水を巡る激しい争いが起きていました。文化十一年（1814）には、阿木川の水を2対1に分水する協議が両用水で成立したと言われています。その後大正十四年（1925）の大水害をきっかけに、現在の位置に取水堰が設置されました。現在も、阿木川左岸から三郷用水、右岸から山本用水が、それぞれの目的地に清流を運び続けています。



中津川市坂下町内

上井用水

（うわいようすい）

中津川市坂下にある上井用水は、取水口を鳥井田（しまいでん）に設け、愛宕山（あたごやま）をまわり川上川の水を運び続けています。この用水は、江戸時代に苗木藩の開田開発が進む中、朝倉氏が開削工事を手掛けたことに始まります。その後、悲壮な最後を遂げた朝倉氏の遺志は、水口源左衛門と安江陽秀に引き継がれました。用水工事の着手に藩主が出した条件は「工事失敗に終わったものなら、ただちに朝倉同様打ち首を覚悟せよ」と実に厳しい通告でした。今も静かに流れる水には、三人の献身的な努力と涙、そして当時の村人の喜びが込められています。



中津川市付知町内

鱒淵用水

（ますぶちようすい）

近世美濃国二大用水と言われているのは、美濃市内から長良川の水を運ぶ曾代用水と、付知川大川用水（鱒淵用水）です。平坦地にある曾代用水と比較し、鱒淵用水は山間峡谷、断崖絶壁の難所を延々十キロメートルあまりにわたる用水路です。当時の付知村には、水さえあれば田畑を開墾できる平坦地があったが、山々に小谷が少なく、その僅かな谷川も水量が乏しく開拓の余地がありなが長い間放置されていました。水を求める村民の願いが叶ったのは、文政十三年（1830）のことです。およそ六十メートル眼下を流れる付知川の水が、はるか上流から届いた時、居並ぶ村民の感激は筆舌に尽くせなかったとの記録が残っています。



田ケロー

『ぎふ水土里のプロジェクト』

岐阜県では、水・土・里を美しい姿のまま未来に残し、その大切さを県民の皆様にご存知いただくための取り組みを展開しています。





中津川市内

付知川右岸用水

中津川市の通称西山台地は、農業に必要なかんがい用水を、天然の降雨や地区内のごくわずかなため池に頼る極度の乾燥地帯でした。台地のすぐ近くには、木曾川があるが、水面は130メートル下にあり利用できませんでした。昭和の中期、隣村の福岡町においては、付知川を水源とする水路の建設が開始されました。時の市長間孔太郎は、「この時を逸し他に名案無し」と決意新たに県や国へ再三陳情を行い、ついには、福岡町から木曾川に水管橋を架して西山地区まで水を導水することができました。付知川の清流を十数キロにわたり運ぶ水路の末端には、苦勞して得た水ができるだけ均等に分水するために、円筒分水工が設置されています。



土岐市内

中肥田用水

土岐市にある一級河川肥田川の西岸に広がる高台は、中肥田と呼ばれています。この地区は、河川より高い位置にあるため、かんがい用水のすべてを地区内からの取水でまかなうことは不可能でした。このため当時の村人は、岩村領主と交渉し、対岸の上肥田内に取水堰を作り、合わせてため池も築造したと伝えられています。十七世紀前半頃に作られた用水路やため池は、その後も災害の度に改修や補修が行われ、多くの労力と費用が投じられ守られてきました。



中津川市蛭川地内

弓場第1ため池

豊臣秀吉によって太閤検地が行われた4百年ほど前、蛭川村（現中津川市）では、米の収穫高が約130tあったと記録があります。江戸時代に入り、苗木藩の領地となった蛭川村では、藩の進めにより新しい田畑が拓かれ、その名残として新開（和田）、新田畑（今洞）、新田（一之瀬・田原）などの地名が残っています。新田開発に伴って必要になった水は、川からの引き入れだけでは足りず、多くのため池が築造されました。現在、蛭川地内には約200箇所のため池があります。この中の一つである弓場第1ため池は、天保四年（1833）に築造され、約二百年に亘り水を貯え続けています。



中津川市内

中津川第1用水

中津川第1用水の創設は、江戸時代中期の寛文二年（1662）と伝えられています。その頃は、元和元年の大阪夏の陣より五十年前後を経て、国内が安定してくると同時に、さかんに新田開発が進められていた時期でした。中津川宿村はじまって以来の大事業は、時の代官山村良豊公の下令により、土木技術と施工知識をもつ大工の古橋源治郎が、工事の主要部分を担当しやり遂げました。この功績をたたえ昭和二十八年には、八幡神社の境内に「古橋翁顕彰碑」が建立されています。



中津川市付知町内

西股用水

江戸時代末期に開発された西股用水は、西股本谷（付知川上流）を取水口とし、付知村（現中津川市付知町）の農業と村人の生活を大きく変えた村の5大用水（当時）の一つです。また、用水路の途中にある隧道（トンネル）は、加地勇次郎によって長年にわたって仕込まれた石工たちの技術力の結晶です。この技術は、岩を壊す時に、岩の上で火をたいて岩をあかめ（熱して）冷水をかけて割れ目をつくるなど独創的なものであり、工期の短縮や通水効率の向上に大きく寄与したと言われています。現在も利用されている隧道は、中津川市の指定記念物として、当時の技術を後世に伝え続けています。



中津川市加子母地内

神林用水

神林用水は、中津川市加子母に位置し、白川（加子母川）の水をおよそ九ヘクタールの農地に水を運んでいます。この用水の起源は、享和三年（1803）、加子母村吉金組の百姓総代であった梅田親兵衛が、神林井水の拡幅及び延長について、関係組頭の連署を太田代官所に提出したことに始まります。およそ二キロメートルの用水路などは、所用人足千二十三人、その賃金等に九十七両を費やしたとの記録があります。その後の災害により幾度となく復旧された水路に当時の面影はありませんが、運ばれている水にはおよそ二百年もの歴史が含まれています。

飛騨圏域



下呂市萩原町内

萩原中央用水

明治時代、萩原町の川東地区は、溪流沿いに水田が点在していました。大正に入り耕地整理組合が設立され、新たに飛騨川から取水する萩原中央用水の建設を含む一大事業が実施されました。事業が完成した大正13年には、地域の水田面積が、当初の50ヘクタールからおよそ3倍拡大し、地域経済に飛躍的發展をもたらしたと記録があります。現在は、水路沿いに遊歩道が整備され、毎年「魚つかみ大会」や「ウオーキング大会」が開かれるなど、地域の方々から生活に潤いをもたらす用水路として親しまれています。



高山市丹生川町内

上野平用水

金森三代重頼の命により寛永十年（1633）ころに始められた高山市丹生川町の西に広がる上野平の開墾は、水が十分になく長い間進みませんでした。人々の願いが叶い昭和十三年によく用水路の建設が始まったものの、太平洋戦争などにより思うように進まず、完成したのは十五年あまり後になります。また、この工事には、戦前、戦後の物資が少なく生活が苦しい中であって、のべ三十六万五千もの人が従事したと言われています。北アルプスから流れ出る小八賀川の水は、今ものべ三十キロメートルの上野平用水を通じ農地に運ばれ続けています。



高山市朝日町内

野中用水

江戸時代末期の文政十年（1813）、朝日村（現高山市朝日町）の青屋地区では、主食であるお米の増産を図るために野中用水の新設が始められました。これは、当時の朝日村では、畑作に頼る農業がおこなわれており、十分な食料を確保することが叶わなかったからです。用水路工事は、資金難により幾度も中断がなされ、希望の水が、約四キロメートルの長い用水路全体に流れるようになつたのは、工事開始から五十年あまり後の明治十七年のことです。その後、何回か修理が加えられた用水路は、今もしめやかに水を運び続けています。



下呂市萩原町内

羽根用水

下呂市萩原町羽根の新田開墾は、江戸時代中期の享和元年（1801）ころから始められたが、水不足や水害などにより困難を極めたとの記録があります。この開墾にあわせ、文政年間（1820年代）に、九良四郎英常ら羽根の農民は、益田川（現飛騨川）の水を引き込む計画を立てましたが、当時の郡代には聞き入れられませんでした。明治時代に入り高山県の梅村速水知事は、羽根の水不足解消のために、都筑九良四郎を「観農役」に任命し、約七・二キロメートルの水路を完成させました。



高山市久々野町内

小屋名用水

江戸時代末期の安政二年（1855）、大字小屋名に住む豪農、森久次は、益田川（現飛騨川）の水をかんがいで用水として利用するために、資産の大半を傾ける覚悟で大工事の決意をしました。最も困難を極めた箇所は、取り入れ口付近の岩盤掘り抜きです。驚くことは、延長三十六間（約七十七メートル）、高さ六尺（約二メートル）、幅五尺（約一・七メートル）もの隧道（トンネル）が、のみだけを頼りにすべて人力でくり抜かれた事です。現在、小屋名用水と呼ばれるその用水の一部は、先人達の偉大な遺産として高山市の文化財にも指定され、美しい風景の中に溶け込んでいます。



高山市国府町内

宮川右岸用水

古川町の上気多や下気多地区では、かんがい用水などをわずかな山の出水に頼っていたため、全体的に水量が不足していました。日照りが続いた時には、春の苗取りの苗を、桶で水運び洗わなければならない時もあったとされます。この水不足の解消は、水の取り入れ場所や経費などの問題があり、長い間実現しませんでした。昭和二十六年から実施された事業の計画樹立においても、宮川右岸用水の主受益地は古川町であるが、取水地点を国府町内に求めたことで、交渉調整に多大の労苦があったとされています。昭和三十三年に完成した用水路は、桜野用水や大野用水、荒城川から取水している鶴巣用水が系統的に整理され、現在も清流を運び続けています。



高山市丹生川町内

若林用水

小八賀川（こはちがかわ）の沿岸では、両面宿儺が亡びた後、大和朝廷系統の人たちによって開拓され、農業を営むようになりました。若林用水は、戦国時代にあった尾崎城の城主塩屋筑前守秋貞による飲農策によって造られたとされています。上杉謙信に従って北国より塩、米を輸入して飛騨の米、塩を掌中に収めて富有であった塩屋氏は、丹生川町町方・坊方を開発するために、自らの富力と権力を傾け、小八賀郷中の農民を駆使して用水路を完成したとの記録があります。この用水路沿いには、平湯街道があったことから、街道の荷役を担う伝馬を洗う馬洗場や道祖神祠（ほこら）など、今も当時の面影が数多く残っています。



白川村内

萩町用水

人類共通の宝物として、世界遺産に登録されている白川村は、訪れる観光客に合掌造りと呼ばれる独特な家の造りを始めとした幻想的な風景を見せてくれます。村内の萩町には、数多くの史跡とともに、かんがい用水や防火用水などとして生活に欠かせない水が用水路に流れています。この水の多くは、白川村と飛騨市河合町をつなぐ天生峠にある国道近くの沢を水源としています。およそ標高600メートル付近で取水した水は、萩町用水を通じて、およそ標高500メートルの萩町まで運ばれています。人目につかない山腹を流れる萩町用水の水は、今も肅々と村を支え続けています。

高原用水

古くから高原郷と呼ばれ、県の最北端にある上宝町は、北アルプス連峰の山ろく地帯にあり四方を山に囲まれた地域です。この地域の眼下に流れる高原川は、北アルプスを水源とし、宮川に合流し富山湾へ続いています。江戸時代、河川沿岸には、既に集落や農地が点在していましたが、水量豊富な高原川からの引き水は、当時としては考えられなかったようです。この構想が具体的に進み始めたのは、日中戦争の戦時対策として食料増産奨励が叫ばれるようになってからのこと。昭和三十二年には、様々な問題を乗り越えようやく約18キロメートルにおよぶ導水路が完成しました。



高山市上宝町内

瀬戸川用水

天正十三年（1585）、豊臣秀吉の命を受け、戦国武将金森長近は、飛騨に攻め入り翌年には飛騨国主となり城下町の形成に力を注いでいました。この金森氏と可重親子によって、飛騨市古川町は、増島城を中心に整えられました。瀬戸川用水は、増島城のお堀の余り水を引いて開田されるために築造されました。この時瀬戸屋源兵衛が工事を監督したことから「瀬戸川」と呼ばれるようになったとのこと。現在も、農業用水のほか防火用水、流雪溝、夏場には打ち水などとして利用され生活に欠かせない用水として地域住民から大切に守られています。



飛騨市古川町内

井口用水

宮川は、川上岳（かおれだけ）を源流とし、小八賀川や荒城川などと合流しながら、県境付近で高原川と合流し、神通川となり富山湾に繋がっています。この宮川の最も上流に位置する高山市一之宮町（旧宮村）では、谷水を利用したかんがいを行っていましたが、耕地が広がるにつれ、江戸時代の初め頃より宮川の水を農業用水として利用し始めたとされています。また、町内に鎮座する水無神社の前の川原は、安永二年（1773）に発生した安永騒動（百姓一揆）の宮村総集会の場として使われたという記録も残っています。町内の農業用水路は、昭和四十二年の土地改良事業により再整備され、現在も清流を運び続けています。



下呂市萩原町内